

第7章 民主主義とアメリカ社会

依 田 博

はじめに：アメリカの悩み

建国の父たち（Founding Fathers）に限らず、アメリカ合衆国を築いてきた人々は、大英帝国ではかなえられなかった「千年王国」をこの地に築こうとしたのであり、この「新世界」ではほぼ例外なく寝食を惜しんで懸命に働いたにちがいない。そうでなければ、建国から僅か150年で世界の「No.1」の社会にまで成り上がることができなかったであろう。

1980年に私がはじめてアメリカの社会を直に見る機会にめぐまれたとき、必ずしもすべてのアメリカ人が「寝食を惜しんで懸命に働いている」とは思えなかった。その頃は、丁度「メイド・イン・USA」の評判ががた落ちしていた時であった。アメリカにいたときぐらい「アメ車」に乗りたいたいと思ひ、クライスラーの中古のステーションワゴン“ヴォラーレ”を購入した。アイアコッカがクライスラー社の建て直しのために乗り込んできて最初に開発させた自動車で、彼自身失敗作と認めた代物だった。もっともそれは帰国後に知ったことだが。

一緒にいた知人が「予備のエンジンオイル」を積んでいないといけな、と言う。その時は、その言葉が何を意味するのかよくわからなかった。しばらく“ヴォラーレ”を乗り回して、何気なくエンジンオイルをチェックしてみると、なんと随分と減っているではないか。エンジンが加熱すると、ボルトとナットの精度が悪くて完全に固定できずにその僅かな隙間からエンジンオイルが噴き出してしまうのだ。そういえば、ショールームに展示してある新車の下にトレイが置いてあったのを思い出した。走ってもいない展示車でも、何かが漏れてしまう。知人は、アメ車の中でも特に出来の悪いものを「レモン」と言うのを教えてくれた。私は、“レモン”を買ってしまったようだ。

当時、日本車などに較べたアメ車の性能の悪さは、奇妙な事態を引き起こしていた。私は、知人からしきりに「日本車を購入するように」と勧められていた。しかし、後で高値で売れる日本製の新車は、輸入台数の自主規制により需要に対して供給が大幅に下回り、順番待ちを余儀なくされ購入まで1カ月以上も待たされる状態であった。中古車を狙うしかない。その中古車も帰国時には購入時とあまり変わらない値段で売れるし、新車から1年間乗った車なら新車よりも高い値段がつく場合もある、というのだ。まさに市場の原理が働いている。私の“ヴォラーレ”も値切ったとはいえ4000ドル（言い値は6000ドル、日本人に値切られたのははじめての経験だと言われた）、それと同じくらいの修理費を費やして、帰国時に約1500ドルほどの値段で引き取られた。1万ドルくらいの日本車を新車で買っておけば、恐らく購入時に近い値段で売れたに違いない。

アメ車でも、月曜日に組み立てられたモノは休み明けで気怠そうに働いて作られるので信頼できない、水曜日のモノは中だるみで、金曜日のモノは休み前で気もそぞろでまた出来が悪い、と陰口をたたかれていた。新車の車内からボルトが落ちているのが見つかった、というのもあった。

すでに家電製品のほとんどは日本製などの外国製品に席卷されていた。それまでは、「メイド・イン・USA」は私達にとって憧れであったのだが、数少ないアメリカ製の家電製品は機能的にも魅力的でなく、价格的にもとうてい外国製品に太刀打ちできる代物ではなかった。憧れは失望にかわっていた。日本などの安い製品に押されたとしても、その品質の相対的な低下は目に余るものがあったのである。ここで「相対的」といったのは、もともとアメリカ製品そのものの品質は変わっていなかったかもしれないが、外国製品の飛躍的な品質の向上があり、それが低価格でアメリカ社会に流入したのために、アメリカ製品が品質的にも价格的にも見劣りするようになった、という側面を指摘したかったためである。

ところで、アメリカは、科学的管理法やフォーディズムなど、経営と生産に関する様式の「先進国」であった。様式の先進国アメリカの製品が国際的競争力を失ったかのようにみえるのは、逆説的であるとしかいいようがない。これらの美しいまでの様式は、労働力の質に依存しないのであろうか。アメリカで私がかいま見たのは、少数の実によく働く人々が、その働きのゆえに高給を勝ちとり、残りの大多数の人々は決められた仕事のなかで適度に労働する社会となっているように思えた。アメリカが独り勝ちしていた1960年代までは、このアメリカの実態は、顕在化することはなかった。しかし、1970年代に入って、特に1973年の第一次石油危機を契機として日本や旧西ドイツなどが、1980年代には NIES、そしてヨーロッパ各国が世界市場に参入してアメリカと対抗することができるようになって、その実態が明るみに出たのである。

科学的管理法もフォーディズムも、組織的合理性の追求の結果として考案されたものだが、それはまた労働力のさしたる高い質を期待しないシステムであるといっていよう。アメリカは、移民によって成り立っている社会である。彼らの多くは、言葉も文化も異なる背景を持った人々であり、彼らの間で共同作業を成り立たせるためには、作業を可能な限り単純化し、かつ標準化する必要があった。製品が単純なものであるときにはその必要があまり生じないが、製品の構造が高密度化して複雑化すればするほど、逆に生産様式を単純化しなければならなかった。1人1人をみれば、それぞれの労働力の資質は潜在的には高いかも知れないが、文化的背景が違うために、それほど高い資質を必要としない単純な生産様式を開発する事情が働いた。アメリカは訴訟社会と言われるほど法律家が活躍する社会であるが、文化的多様性を下部構造とすれば、それを法的合理性という上部構造で押さえ込む必要があった。

しかしながら、美しい生産様式と高い労働力が組み合わさった生産過程は、同じ生産様式でも低い労働力と組み合わされたときよりも同じ製品でも高品質の製品を生み出すと考えるのは自然であらう。技能オリンピックのメダリストたちのなかで、かつては日本人が目立ち、最近では韓国人が多くを占めているものの、アメリカ人メダリストは、寡聞にして知らない。だからこそ、平均的な学力水準の高い日本人労働者の、従って高い労働の質が科学的管理法やフォーディズムをより効果的に機能させた、といえるのではないだろうか。アメリカが在日米軍

基地の機能をさらに強化するのは、その高い地政学的戦略的価値、日本政府による巨額の財政的負担、兵士が休息をとるために相応しい日本の安全性などのほかに、基地で働く日本人労働者の質の高さにある、と聞いたことがある。日本で修理点検した艦船や航空機等は、アメリカで行うとは見違えるほどの出来上がりのよさであるという。航空自衛隊の戦闘機は、アメリカから購入するが、それも日本で組み立てられたもののほうが、アメリカで組み立てたものよりはるかに故障が少ないという。

さて、異なった文化的背景を担う人々から構成された社会は、彼らを結びあわせるためには、標準的・合理的な社会の編成原理を新たに創造する必要がある。あるときは、「民族融和」政策の多くの場合がそうであるように、ホスト社会の編成原理を他の集団に押しつけるかも知れない。あるいは、まったく新しいものを考え出すこともあろう。経済活動では、先ほどあげた生産様式がその一例である。この様式は経済活動の「規律」として機能する。他の社会活動では、どのような「規律」が形作られたのであろうか。

II 規律の機能しているアメリカ社会

土曜の夜、ボストンの郊外にあるナイト・クラブに数人の日本の友人とでかけた。いかにもいかがわしそうな小さなドアを開けて中にはいると、正面に舞台があり、それを囲むように40ほどのテーブルが配置してある。舞台は、イスに腰掛けたときの目の高さよりもさらに下にあった。特等席ともいえるテーブルには、つまりカブリツキには、クラブには場違いな黒っぽい背広姿を身にまとった東洋人たちが、そして彼らの話し言葉からすぐに日本人とわかった人たちが陣取っていた。

舞台にむかって右側には、ビリヤード台が置かれ、舞台に目をくれることなくゲームに熱中する数人の白人がいる。その奥のカウンターでは、白人が小さなジョッキを片手に賑やかに騒いでいる。よく見ると、ジョッキは日本では中ジョッキだ。その向こうの壁にはボトルが少しの無駄もなく並べ立てられている。

ところで、クラブに入るときに入場料を払うのだが、若い兄ちゃんが私たちの顔をまじまじと見据えて、そのうちの一人に身分証明書を見せろと言う。どうみたって30過ぎの男が未成年者に見えたらしい。日本人は、欧米ではおしなべて歳よりも若く見られるので、こんなことは珍しいことではない。

スーパーや書店に行くと、その雑誌コーナーでは、日本に持ち込むことが禁じられている雑誌が置いてある。私の目線から随分と高いところに並べてあり、一番上の段など台を使わないと手が届かない。

ヘビースモーカーの私は、タバコを切らすことができないので、どこへいってもまずタバコの吸える場所はどこか、タバコを売っている店は、と辺りを見回すのが習性になっている。スモーカーをほとんど見かけない大学構内が一番大変だ。タバコの自動販売機などまず建物の外に置かない。それどころか、コインをタバコの値段分だけきっちり揃えておかないと、釣り銭を出す機能など機械が備えていないので、手のひらにコインを広げて確かめないといけない。

やっと見つけた自動販売機の前でコインが揃っていないのがわかったときに、小銭を手に入れるために近くの売店に走る。

寝酒を切らしたのでリカーショップに行く。夜遅いと、得体の知れない人間が店の外でたむろしている。少年たちが多い。彼らは、店に入ろうとする人に誰かれなく声をかけて、酒を買ってきてくれと言う。ここでも年齢を示す証明書がないと買えないのだ。アルコール類の自動販売機など当然ない。

ラジエータの冷却水が噴き出して身動きがとれなかったことがある。高速道路の直線の見通しのよい場所に自動車を止め、子供たちを自動車の窓から手を振らせて、他の自動車に助けを求めたことがあった。アメリカで自動車が故障して誰かに助けを求めても、助ける振りをして居直り強盗に変身する者が少なくないので注意しなさいとガイドブックにあったことを思い出した。こんなときに、もし子供がいたなら彼らを目立つようにしたらよい、というのは子供は危険を感じるとすぐに泣き叫ぶし、いくら強盗でも大人よりも先に子供を黙らせることができないとあった。何台もの自動車が私たちを無視して通り過ぎ、ようやく止まってくれたのが真っ赤なスポーツカーのドライバー。彼のお陰で、駆けつけたレッカー車でカンサス・シティに向かう。3月末の日曜の出来事であった。

カンサス・シティのモータルの前にあったコンビニで家族の夕食をと行くと、ビールがある。サンドイッチやジュースと私の好きなミラーライフを6本を買ひ、雪のちらつく道を渡ってモータルに戻る。妻も、ビールを1本・2本と開け、あつというまにすべてを空にしてしまった。飲み足らないので、同じコンビニに行き、今度はビールだけをレジに持っていったら、売れないという。何でや、と問いつめると、今日は日曜日なので酒は売れない、と返してきた。ほんの1時間前にあんたからビールを買ったではないか、あれはビールではなかったのか、それとも1時間前は土曜日だったのか。いやあの時は、東洋人など見たこともなかったので気が動転し、しかも雪の中を素足にビーチサンダルで来る奴はポート・ピープルで金など持っていまいと思いつつも、やけに高そうな食料を買う怪しい奴にもかかわらず現金で払おうとしたので、ますます日曜日であることを忘れてしまった、と言う。次の朝、朝食を求めて店に行くと、昨晚と同じ店員がいる。食料をレジに並べると、今日は月曜日なのでビールを売れるがどうかと笑っている。アメリカのいくつかの州では、日曜日には酒を売らないことが法律で制度化されている。

路上での飲酒も固く禁じられている。9月の新学期に新入生歓迎や級友との再会を祝したパーティがキャンパス近くの各所で催される。酒の酔いをさまそうと、ふらっと外に出たときに、ボトルを片手にもっていようものなら、直ちに御用となる。罰金を科されたり、一定期間の奉仕活動（ボランティア活動）に従事させられたりする。ニューヨークなどでの街角で、一見するとホームレス風の人が茶色の紙袋を持ってウロウロしているのを見かけたら、その中身はアルコールだと思ってよい。

アメリカは、自由の社会であると同時に、規律の社会でもある。しかし、この規律の力が弱まりつつあるように思える。サンフランシスコ郊外のサービスエリアに10数人の人捜しのポスターが貼ってあった。いうまでもなく、1年間に万を下らない数の誘拐である。ポスターはほ

ば全員が少女。成人女性もいた。性犯罪は、性犯罪歴者のプライバシーを保護しない、との連邦議会の決定（いわゆるミーガン法）を受けて、その後に各州が彼らに関する情報の公開に踏み切らなければならないほど深刻化している。マニアによる幼児ポルノは取り締まっても取り締まってもインターネット上に現れ、モバイル型パソコンの登場は、彼らの行動をさらにゲリラ的にして、取り締まりをますます困難にしている。銃による殺人事件は、先進国のなかでもアメリカで群を抜いて多発している。病死や老衰などによる死ではなく、これは「強制された死」である。後に、アメリカ社会の規律の崩壊の様子をみることにしたい。

III 規律のタガの外れた日本社会

明治期以来、欧米の文化が日本社会に流入してきた。欧米の知的生産物が近代日本社会に与えた影響は計り知れない。第二次世界大戦後では、アメリカ合衆国の影響が絶大である。その発明はアメリカではないものもあるが、アメリカで実用化され、あるいは大量生産された品々が日本に入ってきた。アメリカとの戦争で疲弊しきっていた日本人にとって、映画やTVドラマに見るアメリカ社会の豊かさは憧れのまとであった。

明治維新から第二次世界大戦の敗戦までの期間、欧米の影響を受けつつも、「和魂洋才」の言葉に示されるように日本の伝統文化はむしろ揺るぎないものであった。多くのシステムは、形式を変えたかもしれないが、その組織原理は伝統的な日本社会を投影するものであった。

だが、敗戦は、日本人を自信喪失の状態に追い込んだ。まず家庭が、つぎに地域が、学校が、そして企業までもが教育力を失っていった。つまり社会全体が教育力を失ったのである。現在の日本では、「社会化」機能が広範囲で解体している。若者たちが大人たちを信頼していないことがなによりもその解体の深刻さを示している。大人たちが作り、維持し、依拠してきた生活の規則が尽く若者たちに忌避されつつある。若者たちが大人たちを信頼しなくなった責任は、大人たちにある。彼らが若者たちの信頼を受けるに足るだけのことをしてこなかったからにほかならない。

小学生が通学路にしている道に、自動販売機が置かれている。昼は何を売っているはわからないようにしているが、夜になるとビニボン（注：ビニールカバーで覆われているポルノ写真集）を売っている。今では社会に定着したレンタル・ビデオ・ショップでは、アダルト・ビデオ（AV）が他の映画とは分けられているものの、誰でもそのコーナーに入ることができ、小さな子供でも手のとどく高さに並べてある。最近でこそ11時になったらタバコや酒を自動販売機で買うことのできない。酒は随分と前に自動販売機で買うことができなくなったが、タバコは比較的最近そうなった。それでも深夜まで開いているリカーショップは、いかにも未成年と思われる客に年齢を示す証明書の提示を求めているのであろうか。R指定の映画を上映している映画館は、同様のことをしているのであろうか。ポルノ映画の上映館やパチンコ屋などにかかっている「18歳未満入場お断り」の看板は、店の側の単なる「免責」のためのいいわけに過ぎない。

大学生が競馬新聞を片手にしている姿は、キャンパスの風景として定着している感がある。

最近多くの大学で社会人のための特別入試を行うようになってきているが、たとえ60過ぎで大学生となった人でも、日本では馬券は購入できないはずだが、こうしたことのチェックができているとはとうてい思えない。私の息子たちによれば、高校生でも馬券を買っている者がいるという。

サラリーマンの愛読書である週刊誌が、映画『失楽園』の主演女優・黒木瞳や同じ題名のTVドラマの主演女優・川島なお美の濡れ場シーンを数週間にわたって小出しに、そして競って掲載する。これらの週刊誌は、現在、乗客サービス用としては航空機から締め出されている。客が持ち込むのは自由だが。オーストラリアからの女子留學生がボツンともらした言葉が今でも耳に残っている。日本では、いろいろな媒体でどうしてこんなに暴力やセックスシーンが溢れているのだろうか。それも年齢に関係なく、提供されるほとんどのメディアがそれらを扱っている。電車に乗って困るのは、週刊誌や新聞に掲載されている女性のヌードを隣に座った人がまじまじと見ているときだと言う。幅広い年齢層を対象とした週刊漫画雑誌でも、漫画で女性の下着姿のある部分をリアルに描いている。アメリカからの女子留學生のアパート探しにつきあったことがある。ある女子大生専用のアパートで、管理人の説明を聞いているうちに彼女の顔がひきつってきた。門限は午後7時。外泊も原則として禁止。外からの電話は午後9時から受け付けない。こちらからの電話も午後10時以降は禁止。今のように携帯電話やPHSがない時代のことで、各部屋に電話を引くことも禁じられている。

彼女は、こんなアパートに入る日本の女子大生は大人になり切れていないか、あるいは「バカ」に違いない、と叫びだした。とんでもない、彼女たちはとても賢い人たちだよ、やりかえす。ラブホテルは、別に夜しかオープンしていないわけでもないし、朝から午後7時まで、何をしようとまったく自由だし、「素直ぶる」ことで、子供を信じ切った想像力のない親たちは喜んで彼女たちに仕送りする。外泊にしたって、女友だちの家に泊まることにして彼氏のところで一夜を過ごすことなんて、いとも容易いことだ。禁じれば、その抜け道を探す。それを封じると、別の道を探す。どこかにある話だ。

選択の問題である。結果的には数少ない未成年者たちがタバコや酒を自動販売機で買うに過ぎないのだが、理論的には、彼らの全員が購入する機会が与えられている社会では、自動販売機を設置する人たちの利益が未成年者の喫煙や飲酒の機会よりも重視される。夜の11時に自動販売機を停止してもまったく無意味でしかない。その前に誰でも買えるのだから。この決定をするのは、当然未成年者ではなく、有権者である大人たちである。

表現の自由を求める声は、たとえば「チャタレー裁判」などの知識人サイド、あるいは報道の自由を強調するマスコミ・サイドで一貫した主張である。しかし、規制や規律が権力的に与えられてきたために、いかえれば社会の側にどのような規制や規律が必要であるかの了解を形成する風土が存在しなかったために、表現の自由を求める声は、権力との闘いの側面が前面に出すぎてしまい、社会の側にその声が共有される間もなく、なしくずしに自由が拡張され、この動きと権力との対立に焦点が移ってしまうために、いつまでたっても社会の側にどこまで自由が許され、どこから許されないかの合意が形成されることはない。一方では自由（表現の自由に限らない）を求め、他方では自由の行使の限界を社会的に形成する、このバランスを欠

いているのである。

日本にももちろん規律はある。日本的経営の編成原理である集団主義がその一例である。この体育会的原理は、組織を役割体系の機能的集合以上に人格的結びつきを重視して集団に対する人格的関与を強制し、それに馴染めない人をつまはじきにするために、外国人にはとうてい入り込めない世界をつくり出している。アメリカの生産様式と随分と趣を異にする。

あるいは、「横並び主義」も規律として機能する。1980年代の行財政改革で学校給食のコストが話題となったことがある。確かに、民間の給食業者に較べると、学校の施設を利用した給食は割高である可能性がある。夏期休業などの長期休暇中は、学校の施設やその人員は完全に遊休化するが、民間業者の場合には、他の販路を開拓することで、可能な限り遊休化しないように工夫することができる。それ以上に、戦後の貧困時代に始まった給食そのものの時代的意義が失われたとの理由で、そのものを廃止する意見もあった。だが、学校現場では、その意見には消極的に反応する。もし給食を廃止すると、弁当の豪華化合戦に家庭を巻き込み、弁当を用意する家庭の負担を著しく重くするというのである。制服廃止論も同様である。日本人には、「横並び」と称する「見栄の圧力」が重くのしかかっているのです、公的に基準を与えられないと、自分たちで競って基準を高め設定してしまい、ときとして際限がなくなる。「ほどほど」を形成する自制力が社会に働かない。規律が抑制機能を果たさず、競い合わせる機能を持ってしまうのである。アメリカの小学校に通う子供たちは、リンゴ一個と生パン一枚を紙袋に入れたもので構わないし、むろん豪華な弁当を持ってゆけば、単に軽蔑されるにすぎない。

IV 民主主義と規律：民主主義の難しさ

これまで、経済などの社会的な側面を検討してきたが、政治も規律の問題と深く関わっていることはいうまでもない。というよりも、政治の機能は、社会に規律を課すことでもある。政治の決定が権威的であることは、その決定が社会を拘束することを意味している。たとえある政策に反対する者でも、それが正式な決定であれば、正式に覆さない限りは従わざるをえない。

民主主義は、政治が社会に規律を課すときの一つの様式を指し、決定の影響を受ける者がその決定に関与する権利を保証し、最も深く関与した者、すなわち政治家は、自らの決定に拘束されることを要求する（法の支配）イデオロギーである。

民主主義は、ナショナリズムとともに近代国民国家のイデオロギーの両輪であった。多様な民族を糾合して「一つの国民」を形成するためのイデオロギーとしてナショナリズムが喧伝され、国民国家の形成期に繰り返して行われた総力戦に「国民」を動員する引き替えに「民主主義」と称して「彼らに分け隔てなく」政治的権利を与えた。国民は、政治的権利を行使する替わりに、「労働」、「納税」、そして「兵役」の義務が与えられたのである。ロジェ・カイヨワによれば、近代国民国家が戦争と民主主義を通じて効率的な中央集権体制を築くにいたった（カイヨワ、1963/1975）。戦争は、諸資源を効率的に動員しなければならないが、総力戦となるとその効率性の重要度は飛躍的に高まり、官僚制の発達を促してゆく。社会は、「出世民主主義」(status democracy) によって活発な「エリートの周流」を起し、有能な人材を効率的

に結びあわせて動員する合理的な組織の発展を促す。社会的地位と連動する経済的な機会を平等に分配する出世民主主義は、政治的平等、すなわち政治参加の機会の平等の要求を刺激し、他方、総力戦の動員体制を必要とする政府は労働と兵役および納税の義務を国民に課してきた見返りにその要求を受け入れていった。ナショナリズムは、動員体制をより完全なものにするためのイデオロギーとして機能した。

ナチ・ドイツや大日本帝国が好例であるように、ナショナリズムは一度暴走するとそれを止めることは容易ではない。旧ユーゴスラビアの分解は、ナショナリズムの解体ではなく、ユーゴ国民を形作っていた諸民族がそれぞれのナショナリズムを主張したことによって引き起こされた。この分解過程で生じたことは、まさしくナショナリズムの暴走以外のなにものでもない。

民主主義もナショナリズムと結びついて、総力戦を戦うイデオロギーとして大いに力を発揮したことは第二次世界大戦でのアメリカとイギリスがよく示している。

今日でこそ、ラセットによれば、民主主義は、その意思決定のコストが割高なために、国家が戦争に着手しにくくさせている（ラセット、1993/1996）。戦争に乗り出すためには、議会の承認が必要であり、多様な立場にある議員や政党を説得しなければならない。リンドン・ジョンソン大統領がトンキン湾事件を捏造しなければ、合衆国連邦議会はどうも北ベトナムに対する米軍の爆撃を認めなかったに違いない。湾岸戦争に百億ドル以上の資金を拠出するために海部内閣は、矢の催促をする米国政府に気を使いつつも、国会の了解をとりつけるためには時間をかけざるを得なかった。

意思決定のコストが割高になったのは、小子化と戦争のリアルタイムでの映像が要因として働いている。小子化は、戦争によって跡取りを失う可能性を高め、映像を通じて紹介される戦争は、自分の子供が撃たれる可能性を知るだけではなく、自分の子供が「敵を撃つ」可能性の想像力を刺激する。60年を経過したにもかかわらず、いまだに第二次世界大戦での悲劇の清算がすんでいない現実があるように、戦争の犯罪性は、多くの人々の心に深く刻まれている。かくして、民主主義は、戦争という大規模な国家事業にとっては乗り越えるべき巨大な壁になりつつある。

ところで、民主主義がよく機能する前提は、人々がその価値と意義をよく理解していることである。単に、それは投票率の問題ではない。人々は、様々なレベルでの社会参加を通じて民主主義の価値と意義を理解してゆく。学ぶのは、政治参加の権利はすべての市民に平等に与えられているに加えて、組織や社会にはリーダーとフォロワーがいることでもある。どれほど小規模の社会でも、たとえばアメリカ民主主義を語るときにしばしば引き合いに出される「タウン・ミーティング」でさえも、そこには、提案したり、議事進行をとりおこなう少数者が存在しているのである。彼らは、何らかの正当な根拠があってそうしているのである。その正当な根拠は選挙制度や輪番制のような制度に求められようが、それがどのような根拠に基づいたとしても、そこにはリーダーシップとフォロワーシップの階層構造が存在している。統治構造は、この二つの政治的階層から成り立つことは、直接であれ間接であれそれにかかわりなく政治の基本構造なのである。

そこではリーダーの質が問われるであろう。誰がそれを問うのかと言えば、民主主義のもと

では、それはフォロワーであろうが、フォロワーにその責任を求めるのは酷かも知れない。彼らが状況を冷静に認識し、判断し、決断することを期待するのは、非現実的である。プラトンがソクラテスの言葉として語らせた、真理を究めている哲学者でさえ「望ましい護民官」を選ぶことにしばしば失敗する、との自戒の念があるように（プラトン『国家』）、誰が望ましいリーダーであるかを判断することは容易なことではない。シュンペーターが指摘するように、現代民主主義とは、競争するリーダーの中から等しい政治的権利を与えられた有権者が選択する手続きである。問題は、そこにある。フォロワーは、彼ら自身の「私的利益」を通じてしか「公共利益」を想像することができず、民主主義のもとでは私的利益が公共利益を浸食する事態が一般化する可能性が高く、政治の応答責任は、そのような想像力を正当化する。政治家も、その地位を安全なものとするするためには、有権者の、というよりも票を確実にもたらしてくれる組織された有権者の「私的利益」に反応しがちである。現在の日本で注目を集めている「住民投票」や「首相の直接選挙」が組織された有権者に対抗する手だてなのであろうが、あまりにも性急な主張である。労働者参加型経営の危険性もそこにある。いずれの場合でも、フォロワーの私的利益による公共利益の侵害を一般化することにしか寄与しない。

民主主義が「多元主義」と結びついたとき、すなわち政治が市場化するとき、私的利益による公共利益の浸食は加速される。この状況をローウィは「利益集団自由主義」と、オルソンは「特権の集団」による政治過程の支配と形容する。市民の政治的平等を原則とする多元主義的民主主義は、政治の「市場化」をもたらしたが、経済市場が独占・複占・寡占・カルテルといった市場の歪みが存在しない限り「厚生」(welfare)を最大化することが可能であるように、政治「市場」も、個人もしくは集団が政治的影響力を等しく配分されるときに、政治の「厚生」を最大化する。

現実には、多元主義的民主主義の理論家であるダール自身も認めるように、時間と空間とを問わず存在する政治システムに共通する基本的な特徴がシステム内での政治的影響力の不平等分配にあり、それが政治の本質となっているのである。むろん、この本質は支配と服従との間の影響力の格差を意味しているが、服従の側に存在する格差、いかえれば服従する側の間に支配に影響を与えることができる条件の格差が存在することが実際の政治なのである。アナーキズムが空想的でしかないのは、人々を完全に均質な存在と暗黙に仮定していることにある。大人と子供、若者と老人、男と女など、諸個人は均質な存在ではあり得ないのだ。

「経済」市場の論理は、市場への参加者の間に資源の動員力に格差があるときに、価値の不平等分配を冷酷なまでに加速する。社会主義計画経済が市場経済に移行したときに、「弱者」の旧社会主義経済は、強者の先進資本主義経済によって蹂躪されたことはよく知られている。外資に依存して急速な経済成長をとげてきた韓国が1997年末に陥った経済的混乱も、国際的な資本市場がさらに火に油を注いだかこうになっている。このままでは1998年には100万人単位の失業者が出ると予想されている。マハティール首相の強力なリーダーシップのもとで力強い経済発展をとげてきたマレーシアも、国際的な市場に翻弄されている。国際的な資本市場は、必死になって経済成長を遂げようとする発展途上国を「温かい眼差し」で見守るなどという要素はもたない。市場の「辞書」には、「弱い者への配慮」という言葉はないために、市場で発

生した不平等を権力的に調整する方法がとられる。

もし市場的「政治」が「経済」市場の不平等を調整することができないときには、なにがそれを行うのであろうか。計画経済にそれを期待することができないのは、そのあまりの非効率のゆえである。それともハイエクやフリードマンたちのように基本的に調整不要と主張するのであろうか。それでは、現実存在する不平等が市場経済を通じて残酷なまでの水準にまで拡大することによる社会不安とそれに対処するための政治コストが大きすぎる。

ダールの多元主義的民主主義を「利益集団自由主義」と批判したローウィは、公共利益を強力に組織された私的利益が侵す歯止めとして「公共哲学」を強調するが、いいかえれば「法の支配」する顕教の領域を密教のそれよりも大きくせよとの主張である。ダール自身も、『民主主義とその批判者』で民主主義と道德との関係を強調する。彼によれば、「多元主義的」民主主義は、エリート支配（彼の言葉では「護民官支配」）よりも、社会における自由の総量が大きい分、望ましいと述べて、自由な政治参加は、「市民が道德的かつ社会的存在として人格的に成長する」機会となるべきであり、「道德的に適切な選択の領域での自治」を実現する機会となるべきである（Dahl, 1989, p.91）。

ダールが護民官支配を批判するとき、誰が護民官としての道德的資質を備えているかを誰が見だし、そもそもその道德的資質を誰がどういう方法で養うのかが不明確であるとするのであるが、彼がいうような、自由を保証すれば「市民が道德的である」ことは、いかにして可能であらうか。自律は直ちに市民の道德を高めることになるのであろうか。自由は、市民の全員に「有徳の護民官」の資質を与えることになるのであろうか。

ダウンズが逆転の発想で再定義したリーダーシップ概念は教訓的である。すなわち、リーダーとは、その権力的地位を安定させるために、有権者の政策選好に自身を合わせていくものであって、リーダーの理想や世界観に有権者を引きつける努力を放棄する。大規模社会では、有権者の数は数千万人を数え、アメリカ合衆国では1億人を超す。「彼らを変える」よりは「自分が変わった」ほうが手取り早く、権力の安定化のためには費用最小なのであり、それは一見すると民主主義の政治責任の一つである「応答責任」に適った行動である。そこには、古典的なカリスマ的リーダーシップの姿はない。

全体の利益、聖と俗、一般意思と個別意思、国家理性、公共利益と私的利益といった用語法にみられるように、社会を運営するときに、それらの概念の具体化には、哲学者、政治学者、そして政治家たちは頭を悩ましてきた。実に悩ましい問題なのである。民主主義は、リーダーが決定の影響を被る人々の側に立つことでその問題への「解」を与えようとしてきた。いいかえれば、個人が私的利益の増大に専念することによって社会的厚生が最大になるとの古典経済学の命題を受け入れたのである。

だが、企業の社会的責任や倫理が強調されるように、市民の自由な行動にも、とりわけ政治家の行動にも責任と倫理が求められよう。政治家が市民の中から登場し、市民の手で選ばれる仕組みのもとでは、これらの責任と倫理—その内容がなんであれ—が市民の間で共有されている必要がある。はたしてそれは可能であらうか。

むすび：アメリカの心

ユナイテッド・テクノロジー社がウォール・ストリート・ジャーナルに1979年から掲載を始めたメッセージ広告は、全米で反響を呼び、多くのアメリカ人の心をとらえた。1987年までの間にこの広告に寄せられた手紙は約69万通、リプリントの請求は360万通にも及んだという。1987年に日本語で翻訳出版された『アメリカの心』（同書は英語の原文との対訳の形をとっている）は、1996年に30刷を数えているほど、日本でも多数の読者を得ている。私の関心を引いたのは、各メッセージ広告に付せられている個別の反響のデータである。メッセージの内容は多岐にわたっているので、反響データにより、どのような内容のメッセージにアメリカ人がどの程度の反応を示したかがわかり、彼らの関心の所在を知ることによってできるといえよう。データは、日本語の翻訳書に収められている1979年2月から1985年5月までの間の75のメッセージである。表は、寄せられた手紙数とリプリントの請求数の多い10遍（表1と2）とそれぞれが少ないほうの10遍（表3と4）のリストである。

手紙数とリプリント数とはほぼ同じ程度の反響を示している。多い反響から、アメリカ人が大切にしようとしてきた価値が見えてくる。まず、成功（アメリカン・ドリーム）に高い価値を見だし、そのためには、勉強・努力・たゆまぬチャレンジ精神が不可欠であると説く。もし成功できなくとも、平凡な人生にこそ真実がある、あるいは晩成型の人生もあると慰めてくれる。なによりも、成功をおさめる人のほうが圧倒的に少数派なのだから。さらに、この時期のアメリカが直面してきたセクハラやプライバシーの侵害が深刻であることもわかる。

他方、アメリカが担ってきた平和の創造という「人類的課題」に対する反響は思いのほか少ない。そして、その課題を「誠実に」担ってきたアメリカの英雄は、もはや人々の心を衝き動かすことはない。表には現れていないが、1979年6月に掲載された「ジョン・ウェイン賛歌」もはかばかしい反響を集めなかった。アメリカ開拓時代の白人のフロンティア精神を俳優として演じて見せたこの英雄は、その晩年、ベトナム戦争やアメリカの核開発に積極的な支持を表

表1 アメリカ人の心（手紙数の多い10遍）

テーマ	手紙数	リプリント数	掲載年月
失敗を恐れるな	36,158	123,641	1981. 10
誇るべきアメリカ	28,107	104,394	1981. 1
平凡な人生に真実がある	26,538	81,063	1982. 11
高い望みと成功への努力	23,344	99,225	1981. 6
ゴシップの破壊性	21,518	90,763	1981. 3
学力低下への危機感	21,488	405,271	1979. 9
単純さとアメリカ文化	20,926	99,730	1979. 2
セクハラ	20,454	130,548	1979. 5
子供へのメッセージ（実は子供の嫉）	20,360	116,375	1983. 3
前進	19,481	62,867	1984. 1

出所：『アメリカの心』より筆者が作成。以下同じ。

表2 アメリカの心（リプリント数の多い10遍）

テーマ	手紙数	リプリント数	掲載年月
学力低下への危機感	21,488	405,271	1979. 9
弱い者は知恵を出せ	5,069	207,512	1981. 11
セクハラ	20,454	130,548	1979. 5
失敗を恐れるな	36,158	123,641	1981. 10
子供へのメッセージ(実は子供の躾)	20,360	116,375	1983. 3
誇るべきアメリカ	28,107	104,394	1981. 1
単純さとアメリカ文化	20,926	99,730	1979. 2
高い望みと成功への努力	23,344	99,225	1981. 6
ゴシップの破壊性	21,518	90,763	1981. 3
早熟と晩成	17,663	81,990	1979. 8

明したのは、アメリカ的なものが失われつつあることを感じとった彼のあせりの表れなのであろう。アメリカ人は、世界の警察としてのアメリカの使命を脱ぎ捨てようとしているかのように見える。

75遍のメッセージを通じて、もっとも多く取り上げられたものは、子供たちの甚だしい学力の低下と躾のシステムの衰退を嘆くもの、アメリカ人の自信を回復させようとして自らを叱咤激励するもの、フロンティア精神の復活を願うもの、などであった。

かつてニュース・ウィーク誌に掲載された漫画に、アメリカの子供たちの頭の中はフットボールや野球のようなスポーツの英雄と人気アニメの主人公が詰まっており、アジアの子供たちの頭の中には数学や科学の知識が詰まっている様子を描いたものがあった。アメリカの子供たちの学力の低下を皮肉ったものだ。自由なアメリカの教育のもとでは、たまたま先生と波長のあった少数の学力を伸ばすことができた子供たちと、例外的な運動能力に恵まれた子供たちがアメリカン・ドリームを夢見ることができる。もっとも教育の手間がかかるのは、学力を伸ばすことができないでいるか、あるいは例外的な運動能力に恵まれない子供たちの教育であり、それを行ってこそ教育の真価があるはずなのだが、アメリカの学校は、その教育を怠ってきた。経済的合理性を重んじるアメリカ社会では、成功が不確実でコストのかかる行動は回避される。

表3 アメリカ人の心（手紙数の少ない10遍）

テーマ	手紙数	リプリント数	掲載年月
善良なアメリカ人に	2,744	12,634	1985. 2
企業家精神	2,602	9,842	1984. 3
飲酒運転の撲滅	2,503	22,157	1984. 6
社会の基本的仕組みを知る	2,364	23,602	1982. 1
犯罪社会と刑罰強化	2,352	14,227	1981. 9
現状に満足するな	2,328	11,292	1980. 8
女性の権利	2,150	13,907	1984. 11
自分を大切に	1,866	12,031	1982. 5
平和の価値	1,461	10,331	1985. 5
アメリカの英雄	941	9,590	1985. 5

表4 アメリカの心（リプリント数の少ない10遍）

テーマ	手紙数	リプリント数	掲載年月
灯台もと暗し（青い鳥は側にいる）	3,137	14,770	1980. 12
友人を大切に	3,054	14,622	1982. 12
犯罪社会と刑罰強化	2,352	14,227	1981. 9
女性の権利	2,150	13,907	1984. 11
善良なアメリカ人に	2,744	12,634	1985. 2
自分を大切に	1,866	12,031	1982. 5
現状に満足するな	2,328	11,292	1980. 8
平和の価値	1,461	10,331	1985. 5
企業家精神	2,602	9,842	1984. 3
アメリカの英雄	941	9,590	1985. 5

「個性を伸ばす」名目で、実は、教育を怠ってきたのである。このメッセージ広告はそのことに気づいているようには思えない。

アメリカ社会は、近代主義精神に満ち溢れていた。個人は精神的に自律し、他者による強制を必要とせずに主体的に行動し、コミュニナル・アクションにも積極的に参加する。これが理想のアメリカ人である。リースマンは、このようなアメリカ人の性格を「内部指向型」と表現した。彼自身は、その性格を「理想」とはしなかったのだが、『孤独な群衆』の読者はそう受け取ってしまったらしい。リースマンは、「他人指向型」の性格に平和と調和を求める傾向性を見だし、攻撃型の内部指向型人間を理想とみなすことに反対している。

私は、新たな社会的性格の型があるとみている。それは、「漂う人格」とでもいうべき「無指向型」性格である。人生の目標を見失い、社会は必ずしも自分を活かしてはくれないと感じている人々は、他人もそして自分自身をもただ単に消費の対象としかみることができなくなっている。

アメリカは、少数の攻撃的な「内部指向型」性格の人間があくせくし、多数の「他人指向型」と「無指向型」性格の人間が社会の中で漂っている社会である。これが多元主義的民主主義の帰結であるならば、その帰結を受け入れるべきなのであろうか。

しかし、民主主義イデオロギーは、国の境界という矛盾に直面している。このイデオロギーが、政治の決定の影響を受けるものはその決定に関与する権利を保証するものである限り、ある国家の決定が他国に影響を与える国際社会の常識に鑑み、たとえばアメリカや日本の行政の長の選任に他国は口を挟むことができないのは、このイデオロギーの原則に反し、インターネットは、この原則を地球規模で徹底させる可能性を秘めている。このとき、経済合理性以外の規律を欠いている民主主義システムは、世界に何をもたらすのであろうか。

参考文献

- ケネス・J・アロー 1963/1977『社会的選択と個人的評価』（長名寛明訳、日本経済新聞社）
- 同上 1974/1976『組織の限界』（村上泰亮訳、岩波書店）
- マンサー・オルソン 1965/1983『集合行為論—公共財と集団理論』（依田博・森脇俊雅訳、ミネルヴァ）

書房)

- ロジェ・カイヨワ 1963/1974 『戦争論～われわれの内にひそむ女神ペローナ』(秋枝茂夫訳、法政大学出版会)
- アンソニー・ダウンス 1956/1980 『民主主義の経済理論』(吉田精司監訳、成文堂)
- ブルース・ラセット 1993/1996 『パクス・デモクラティアー冷戦後世界への原理』(鴨武彦訳、東京大学出版会)
- セオドア・J・ロウイ 1979/1981 『自由主義の終焉—現代政府の問題性』(村松岐夫監訳、木鐸社)
- RICHARD KERR 1990/1990 『続・アメリカの心』(楓セビル訳、学生社)
- UNITED TECHNOLOGIES CORPORATION 1987/1987 『アメリカの心—全米を動かした75のメッセージ』(岡田芳郎/楓セビル/田中洋訳、学生社)
- Robert A. Dahl 1989 Democracy and Its Critics, Yale University Press; New Haven and London.
- Arend Lijphart 1984 DEMOCRACIES: Patterns of Majoritarian and Consensus Government in Twenty-One Countries, New Haven, Conn.: Yale University Press.